

昭和
和和
四十四
四十五年

七月二十
二月十五
日

第三種郵便物認可
行(毎月一回・十五日発行)

(通第二五九号)

慈

光

第二十二卷

第十二号

次

信ぜんとして欲して信ずるに非ず
信ぜざる可からざる故に信ずる也……………近角常観……………(1)

信を行く旅人抄……………池山栄吉……………(4)

親様育ち……………福島政雄……………(10)

目

¹³⁷³¹死と対決出来るか……………柳瀬留治……………(12)

現代の仏教の在り方……………松本解雄……………(17)

聖人は今一人の私……………花田正夫……………(20)

信ぜんと欲して信ずるに非ず

信ぜざる可からざる故に信ずる也

近 角 常 観

信仰は夫自身が窮極であり、夫自身が生命である。理由ありて信仰するのではなく、目的を達するために信仰するのではない。況んや自分で故意に力んだとて信仰が得られるものでなく何故に信ずるかと問われたとて返答出来るものでない。強いて言えば信ぜねばならぬゆえ信ずるのである。信ぜずに居ろうと思つても一日も信ぜずにはおられぬからである。

熟々過去を顧みて既に通つて来た行程を考え、将来踏み出そうとする希望を辿るについても、仏陀の偉大な力が吾々の頭上に加えられることは、とても疑うことは出来ぬ。若し従来仏陀を信ずることがなかったならば如何に道を踏み迷うたか分らぬ。人生の行路は所謂蟻の戸渡りである。一心正念に左右を顧みることなく行くべき所へ行けたのは仏陀の靈勅の力強き呼び声があったからである。仏陀の心

自分自身の運命を考えて見るに、如何なる程度まで危殆に瀕してあるのか底気味悪くなる次第であるが、丁度それに比例して仏陀の広大なる力は如何なる点まで行きわたっているのであるか。仏陀の周密なる慈悲は如何なる奥深いところまで徹到して居るのであるか、今更の如く仰歎して感謝の涙にむせぶことがしばしばある。

過去をふりかえつてみて然るのみならず、将来をのぞむにまた同様である。現時の社会の實際を考うるに人心の向背、世路の險悪なことは、怒濤狂瀾のごときのものであつて我々この中に処することはほとんど片舟を漕ぎ出したようなものである。我々は此の如き風波の荒い間に立って、毅然として進むべき大勇氣の起るのは前途たしかに希望の灯明台が輝いているからである。信仰の上より来る希望の生命なるものは実に云うべからざる力強きものである。たとふべからざる味の深いものである。若しこの希望なかりせば人生は暗黒である、無意味である。

釈尊が成道したまいしとき、東の空にひらめきつつあつた星の如く、吾人は暗黒の世界の中に仏陀の光明を望みつつ進むのである。ひとたびこの光明を目標としたる以上は、足先をかえりみて遲疑する必要がない。人生の如何なるものも、この光明をさえぎることは出来ぬ、罪惡もこれを障(さ)えるべからず、死もまたこれを障うるべからず。

は我々の心に入り満ちて右すべきか、左すべきか、念々刻々親しき導きを蒙りたのである。

然るに人間は勝手なもので、とかく何事も自己の力で出来たように思つて居る。これは大なる誤である。幼い子供がすこぶる得意で活動して居るときは、すべて自分の力でやつてのけた積りである。よちよち足に力をいれて一人前歩いたように思つて居るが、実は親の手につかまってややひき釣られて行つた趣である。その次は大手を振つて独立独行のつもりであつたが、何ぞ知らん、親はうしろにまわりて両手をひろげてひそかに擁護しておつたのである。

頑是なき子供こそ知らぬが、その歩きつつある所は、一歩踏みはずせば逆様に墜落して身体を粉微塵にすべき高き縁側もあり、何処をかまわず手を出す中に、炭火が真赤になつて、たちまち大怪我をまねくべき火鉢もある。つくづく

雲来りてかえつて平素氣付かざりし光明の如何にあまねかりしかをあらわし、死来りて永久の生命の如何に不朽なるかを示さるるわけである。死は室内と室外をへだてる一片の戸の如きものである。戸を排して親しく日光に浴するもよし室内にありて倦むことなき大悲の光にそだてらるるも嬉しい。つくづく考えて見れば、将来如何なる道に導かるるかは勿論わからぬが、唯偉大なる仏陀の導きはたとい天地が砕けるとも、社会が顛覆しても煥(かん)として變ることなきはたしかな事実である。生かそうと、殺そうと仏意の如何は知るべからず。されどただたわけなしに一歩一歩親しく仏陀の膝元に引きよせられて攝取の心光によつて、のがれんと欲してものがるべからざる救済を蒙りたる実感は、眼前の事物を見るよりも確実なる経験である。

さてかくのごとき過去における仏陀の擁護をおもいかえし、将来における仏陀の指導を感じるに、仏陀が我々に對して加えたもう力の偉大なることはとても考えのおよぶところではない。我々が仏陀に對する關係は、あたかも蟻が大山の麓をまわりて、遂にその全体を知る能わざるがごとく、魚が大海を遊泳して常に水を離るる能わざるがごとくである。我々は日常何気なく日暮しをなしつつあるときに、実に意外千万の出来事のために内心深く思ひあたること何度々ある。しかしてその事件のため内心深く打たれること

が多い。ことに信仰に直接関係を有する問題において、一挙手一投足のこと、実に偉大なる結果をもたらすことがある。また、たとい直接信仰の事柄でなくても、信仰の導きの下に行いたることなれば、その結果はかならず信仰的に出来ている。この時において、仏陀の力の不思議なることを事実上に見ることが出来る。

ここに至りて、信仰は信仰せんと欲して自己を凝り固めて信仰をつくるのではない。この如く内心において、事件において、昭々たる事実、信仰せず居ろうと思つても信ぜずには居られぬのである。むしろ如何にこの信仰を碍(さまた)げんとするものもあるも碍ぐべからず。この信仰のためには如何なる困難に遭遇するとも辞すべきでない。吾人はこの信仰のために生き、またこの信仰のために死すべきである。つまり信仰はそれ自身が生命であり、又目的である。われわれは信仰することによって仏に成ろうと成るまいと、すこしも結果に関係すべきでない。「作仏をはかる勿れ」と云い「地獄に落ちたりとも更に後悔すべからず候」と云う、古聖賢の告白は信仰の結局を打明けられた極所である。

此の如く仏陀の偉大なる力は仰げば仰ぐほど不可思議にして、時々厳肅なる靈感におそわれて、おもわず襟を正しくすることであるが、最後にいたりて私が最も不思議に感

ずるには、何故にかくのごとき確実なる信仰が吾人の内心に宿り得たかとのことである。

我々のかわりやすかりし心の中に、たのみ難かりし人間の力にて、いかでこのごとき信仰の起り得べきわけがない。たしかにこれは仏陀の威力の所為にあらずんば、何人も出来ることではない。ここにいたって、信仰自身が仏陀の力である。信ぜざるべからざる故に信ずるといふ事柄までが仏陀の賜物である。この極点に達すればむしろ信仰自身が仏陀廻向の靈界の一大事実であるという方が適切である。

(信仰余瀝、第十六章)

法然上人法語

近來の行人、觀法をなす事なかれ。仏像を觀ずとも、運慶、康慶が造りたる仏ほどだにも觀じあらわすべからず。極樂の莊嚴を觀ずとも、桜梅桃李の花葉ども觀じあらわさんこと難かるべし。(常に仰せられける御詞)

ここにわが如きは、すでに戒定慧の三学うっはの器うつはものにあらず。この三学の外にわが心に相應する法門ありや。わが身にたえたる修行やあると、よろずの智者に求め、もろもろの学者にとぶらひしに、教ゆる人もなく、しめすともがら(聖光房に示された御詞)

信を行く旅人抄

(その一)

池山栄吉

純金の塊の如し

一体、歎異抄は、いわば純金のかたまりのみたようなもので、そのうちの一部を取ってみれば、全体がわかるので、本抄のどこにもかしこにも、本抄の全体が含まれているです。

本抄は、全体を読まなくてはわからないものではない、また全体を読んでも必ずしもわかるものではない。要は、一点その精髓に浸透するか、しないかに係るのであります

不磨の現実性

本抄の文句はすこぶる古典的ですが、その内容はまことに生き／＼とした新味にみちています。それは古今を通じてかわらない不磨の現実性に基くからであります。

一卷の核

『そのゆえは罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがた

めの願にてまします』

私は本抄を拜読して、この文のところにいるたんび、ああここが大本だなどという感に打たれます。これこそ本抄一卷の核であり、骨子であります。いや独り本抄の核であり骨子であるばかりでない、他力浄土の教一般のそれであります。それもそのはずです。法蔵菩薩の目的、弥陀如来の御思召、即ち本願がそれなのであります。

『弥陀の誓願の不思議』もこれから出た。『念仏もうざんとおもいたつ心』もこれから出る。『撰取不捨の利益』も、『如来よりたまわりたる信心』も、『無碍の一道』も『非行非善』も、『無義為義』も、『親鸞におきてはただ念仏して』も、『善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや』も、『親鸞もこの不審ありつるに』も、『親鸞一人がためなりけり』も、いやしくも絶対他力そのものの顕現である限り、一つとしてこれから生じたのではないものはあ

りません。

弥陀の本願とは

そも／＼本願とは、我身にまつわる罪業の重みに、迷いの苦海に沈淪したまま、永劫に浮びあがる機会のない衆生（もの）を、悟りの境涯に救い出してやりたい、救い出さずにはおかない、という如来大悲の意志であり、力であります。この意志であり、力である本願の働きて、罪悪深重煩惱熾盛の衆生がたすかるのであります。

仏心をいただく下地

私はまえに聖人の和讃に『外儀（げぎ）のすがたはひとごととに、賢善精進現ぜしむ、貪瞋邪偽（とんじんじゃぎおお）きゆえ、奸詐（かんさ）ももはし身にみてり』とあるのを誦するごとに「ひとごとと」とある点は、世間一般の人のことと自分のことではないと片付けていたが、ある時ふと、自分は果して外に賢善精進の相（すがた）を現することはないか、と省みた時、なか／＼ないどころではないことに思いついて、人ごととあるのは、他人事ではない、自分のことだと驚いたことがあります。罪悪深重、煩惱熾盛の衆生とあるのを、他人事のように読み去ってゆく人は、まだ／＼如来の御慈悲、本願のかたじけなさを肝銘するとは出来ません。罪悪深重、煩惱熾盛の衆生とは、この自りです。

いわゆるの信者

ニイチエは『超人（ちょうじん）』の中に『君方は超人を信じるといふのかね？けれども超人がなんだね！君方は私の信者だといふが、一体信者というものがなんだね！君方は君方を探したことがなかったじゃないか、だのに私を見付けたんだ。信者というのがみんなそうなんだ。だから信仰というものがみな駄目なんだ』と書いています。

信仰の極致

『今時の道俗、己が分を思量せよ』と聖人は私共に注意を喚起されます。信仰は己を知るをもつてはじまるのであります。己を知ることがいよいよ深ければ深いほど、信仰の対象、絶対他力はますます／＼己に近づいて来るし、絶対他力が近よるに従って、己が相が層一層はつきりと見えてくる。ついに、己と他力とがピッタリ出遭って、函蓋相應（かんがいそうおう）したところが、信仰の極致であり、時尅（じこく）の極促（ごくそく）であって、ここにいたってはじめて、己の何たる、他力の何たるが了解されるのであります。

今まで、ただ偶然にあるもののように思っていた絶対他力、換言すれば、弥陀、本願、念仏等は、そうではなくて

分のことに外ならぬと痛感する人にして、はじめて本願の眞価値がしれるのであります。それでこそ仏心の全体を頂く下地ができたというものです。

罪悪の自覚

罪悪深重、煩惱熾盛という自覚がないと、ピッタリ本願と出遭うことができません。そうでないかぎり、如来の御心と私共の心とはつながりません。自分の力でどうすることも出来ない自分である、とわかったところに本願が要る、絶対他力が要る。それに気づかぬ人には、本願は猫に小判であります。

自分の罪の深さ、まどいの強さにしみじみ気づいて、しかもどうすることも出来ない『わが身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、しばらくも出離の縁あることなし』と思わしられて、ここにいよいよ／＼他力絶対の救済がなくてはならないものとなります。そうと思わしられない限り、わがはからい、所謂自力の蠢動（しゅんどう）はやみません。自力の蠢動する領域には他力の影はさしません。裏からいうと——実はこう言った方がより正しいのです——松蔭の暗きは月の光かなで、弥陀の光明に照らされる胸の底に『地獄は一定すみかぞかし』の諦忍（たいにん）が目覚め『他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけり』の確信がきざすのであ

所謂、為物（いもつ）、即ち罪悪深重、煩惱熾盛の衆生、この自分をたすけん為に存在するのであった、如来と自分とは、切っても切れない、離れようとて離れられない不可分の必然であると確信されて、この世からなる未曾有（みぞう）の天地がひらけてくるのが、絶対他力の信的生活であります。

仏とは？

そも／＼仏とは、人間の進化発達し得べき限りを尽くして混沌たる迷いの境涯を蟬脱（せんだつ）して、純粹の悟りの境涯に転入したものを、即ち、単なる理想、概念ではない実在であります。

仏の本意

『煩惱の黒雲はやくはれ、法性の覺月すみやかにあらわれて』という不生不滅の境地から『無明煩惱しげくして、塵数（じんず）のごとく遍満す』る生死流転の闇の中をうろつくわれ／＼衆生を眺められたらどうでしょう。

難破した船をみかけては、それに乗っている人々の溺死を坐視するには忍びない。無心にレールの上に遊んでいてゴウ／＼と近よる汽車の音にも驚かない頭はない子供を見ては、安全地帯に抱き出してやらすにはいられない。それが犬の子であっても見殺しには出来ない。我々自利を主と

する人間ですらそうであります。いわんや悲智円満の仏に
おいておやです。『苦惱の旧里』『火宅無常』の中から、
われわれ衆生を救い出してやりたいというのが、仏の本意
でないはずはありません。かの法華經七喻の一として名高
い、火宅の喩、火のまわった家の中で危険の身にせまるの
もしらず、焼きつく苦痛をいともせず、遊びに気をとら
れて脱れようともしないわが子達を、どうかして外に出さ
せ、危険からのがれしめたいと、とつおいつ工夫をこらす
年老いた長者の焦慮も想(おも)われます。

阿弥陀仏とは

大悟の域に達したいという人間至高の理想が具体化し、
人格化したのが仏であるように、衆生を濟度したいという
諸仏に通ずる理想が具体化し、人格化したのが阿弥陀仏で
あると云ってよいと思います。実に阿弥陀仏こそ、釈尊も
称歎せられた通り『威神光明最尊第一』で、真に仏の中の
仏と仰がれるのであります。

信の一念

『弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をば
とぐるなりと信じて』とある、この信ずるということ一つ
が肝腎かなめで、絶対他力、親鸞聖人の宗教はこれ一つに
終始する。

法をもつかと、前途を眺めてみるとそこにはかなり賢善精
進な自分がうつります。そこには憧憬の我があらわれるか
らであります。それが実際問題に出くわすと、賢善さ精進
さは破れてしまいます。この憧憬の我を現実の我と取違え
て、これが本当の自分だなどうけとると鬼が笑います。
西洋の諺にも『地獄への道は、善い目的で敷きつめられて
いる』とあるのは、やはり理想に実行のともなわれないのを
言ったのであります。

自分の実態を知るには

自分を知るには、むしろ目を後に向けて、過ぎてきた我
が行いをかえりみた方が確かです。瞑目一番、自分は利己
的であるか、利他的であるか、自分の人格を尊重し、他人
のそれを尊重するかと、現在から過去への自分をかえりみ
ると、かなりの確に割り出されます。ここに自分の価値の
案外薄少なのに驚かない人があるでしょうか？

信仰に徹した人

道德家は自己洞見(どうけん)に拙(ち)であります。それに
堪能なのは他力信に徹した人であります。もと／＼絶対他
力に帰したのが、自分で自分の始末がつかなくなったのに
原因するのですから。

祖師の信後、紙衣(かみこ)六十(じゅう)年の生活は、ここ一つの
味わいを、自らも味わい、人にも味わわせたいとの精進に
外ならない。

この信の発生の瞬間は『念仏もうざんと思ひ立つところ
のおこるとき』で、これがすなわち信の一念、聖人のいわ
ゆる『信樂開発(しんぎょうかいほつ)の時尅の極促』であ
ります。

人の心は知りにくい

人の心は知りにくいものであります。一層見えにくい
のはわが心です。『汝自らを知れ』とは昔ながらの新味に
富んだ格言です。ニーチエは、わが心を蠮(かき)にたとえ
ました。なかみがドロリとして気味わるく、ヌラリ／＼と
して掴みにくいからであります。

わが心の中身の気味わるさに、おぞけをふるった人でな
ければ、まじめに信仰を求めるところも起るはずがありま
せん。

憧憬の我と現実の我

自己を知るについて注意せねばならぬのは、目をさきに
向けると、比較的立派な自己があらわれ、ややともすると
自分で自分にだまされることがあります。即ち将来はどん
な目的を追求するか、その達成の手段はどうした覚悟と方

弥陀仏は、私が悪くはいかぬ、心が醜くは救われぬと
は言われません。よくなれず、わるさもやまない私を、ど
こまでも見捨てないのが本願であってみれば、その心光に
攝取されるのは、ありのままなる私であります。私自身の
意識にさえほらない心事までも見通しの弥陀仏に対して
は、此方から打ちあけるも何もあったものではありません
かえって弥陀仏のへだてない気安だてから、遠慮や気兼ね
の障りをこえて、その蔭になつていたものまで目について
今迄気づかなかつたことまで気づかして貰えるのです。そ
の際自知(じち)が深まれば深まるほど、一方にいよ／＼慚
愧の加わると共に、他方ますます／＼感謝の強められるのが信
仰の特徴なのであります。

義なきを義とす

信仰は如来の慈悲にあきれるということであり。な
んのことではない、慈悲と我慢の綱引であります。根気のい
い方が勝つのです。如来の根気に呆れ果てる。我慢が手を
放したとたん、さすがの我慢もずる／＼と如来のふところ
に引き寄せられて了うのであります。さてその手の放した
ところが無義、引かざるままにまかせるのが為義、義なき
を義とすの妙境が、こうしておのずから開かれます。

時節の到来

蓮如上人も、油断なく手に手をつくした上で事が出来ればこそ時節到来とは云うべきで、宿善無宿善というのも、油断なく聴聞を心にかけての上のこと、「信心は聞くにきわまる」と言っています。

それにつけても望ましいのは、出来るだけ聞きもし、読みもすることありますが、同時に聞いたり、読んだりしたことを、ひしと身にひきあてて味わい、考えてみるのが何より大切なのであります。またせめて口ぐせになりと念仏を称えるようにすることも信への過程の一方方法である、と信すべき理由があります。終りに一つ大事なことは、信仰を求める上に、十分に信頼し得べき人を発見することです。歎異抄の著者が「幸に有縁の知識によらずんば、いかでか易行の一門に入ることを得んや」と云い、聖人が『よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり』と仰言ったのがそれでありました。私の如きも聖人を『よきひと』と仰いで、仰せのままを信じさせていたただいたのであります。

未完

御一代聞書 (二二四)

「仏法に厭足（えんそく）なければ、法の不思議を聞く」といえり。前住上人の仰せられ候「たとえは世上にわが好きこのむことをば、知りても／＼猶よく知りたく思うに、人に問い幾度も数奇（すき）たることをば聞きても／＼能く聞きたく思う。仏法のことはいくらび聞きても厭かぬことなり。知りても／＼存じたき事なり、法義をば幾度も／＼人に問いきわめ申すべきことなる由」仰せられ候

全 上 (四八)

法敬坊九十まで存命せうろう「この歳まで聴聞申し候えども、これまでと存知たることなし。あきたりもなきことなり」と申され候。

全 上 (一三〇)

ひとつことを聞きて、いつも珍らしく、始めたるよりに信の上にはあるべきなり。ただ珍らしきことを聞きたく思うなり。ひとつこと幾度聴聞申すとも、珍らしく始めたるよりにあるべきなり。

全 上 (一一三)

道宗は「ただひとつ御詞をいつも聴聞申すが、始めたるよりに有難き」由、申され候。

親様育ち

福島政雄

何年以前の秋であったか忘れたが、東京の仏教書肆（しよし）で「貞信尼物語」を手に入れた。何年ぶりであったか、私は久しく此の本を持たなかつたのである。久し振りに食るようにあちらこちらと読んだ。そして宮川の妙忠尼の「親様育ち」という言葉がまた新しく私の胸にひびいた

八木浜の嘉右衛門は「お前は聴聞育ち」と言われた言葉がグッと胸にこたえたという。そこで私は親様育ちか聴聞育ちかと考え、すぐに自分は親様育ちだと思った。よほど以前に或る田舎のお婆さんが御講師の口ぶりをすっかり覚えて、そんな調子で信仰談をするのを聞いたことがあるが今から思えばそれは聴聞育ちの最も著しいものと思う。自分には深い味わいもなく、うまく御講師の口まねをする。これは聴聞育ちで信仰も何もないと思う。

それではあなたは信仰があるのかと私にたずねられたら、私は何と答えるでしょう。私は信仰がありますなどとお答えすることは出来ない。私の今までの八十年はつまづきだ

らけの八十年である。何で自分は立派な信仰があるなどと厚かましく言われよう。併し私は自分が親様育ちということとを否定は出来ない。

三十代の私は聴聞育ちであったかも知れない。自分がいかど信仰があると思つて近角先生の口まねをして人に説くばかりでなく、信仰の論理というようなものを仮定して人を論究し行きつもらせて得意がっていた。信仰を笠に着た傲慢な奴そのものであった。私の父が「政雄は高慢気がいになるかも知れない」と心配したのも尤もの次第と思う。母が世を去つて十年あまり、父が亡くなって五六年経つ頃、或る晩広島の浄法寺で臼杵先生から長者窮子（ちやうじゃくうじ）のお話をきいた。生みの親の此の世のいのちが終ると同時にその全生命が子供の一人一人のいのちに入り込むというお話であった。その時私はハッと感じ深く感じた。「尽十方の無碍の光明に一味にして」ということを私はその時から生みの親の上に感ずるようになった。親

様育ちということがはっきりとなった。仏陀のまことは生きたまことであると近角先生が仰せられていたことをわかったように思ったと思う。併しそれから私が立派な人間になったというのではない。慎(つつし)む心は持つようになった。持っているつもりであった。併しその心を破って煩惱が常に起った。叡山で有りがたいお話を聞きながらも煩惱の奴隷のようであった私、求信の一路を辿るつもりでありながら、ふみ迷う煩惱の深刻さに苦しんだりした。

五十台になってから少し心が晴れて来た。「至徳の風靜かに衆禍の波転ず」という聖人のお言葉が少しわかるようになった。併しそれは自分に立派な信仰があるようになってたというのではない。自分は信仰があるなどと言えるだろうかという心境になって来た。カラマゾフの兄弟を繰りかえして味わって見ると、三十台の私はミーチャに自分の姿を見ると思っていたのが、五十台になるとフォードルに自分の姿が見えるようになった。つくづくなさないことである。そのなさないのどん底にお念仏が浮かんで来る。そこに親様の感じがある。しみじみとした感じである。

一体私はお念仏申そうと思つて称名したことは滅多にない。自然に浮かぶお念仏称名、それも口の中でかすかに称えるだけである。口がバクバクと動いているかも知れないが、声は殆んど出ない。浄土宗で高声念仏というのははず

かに外にきこえるほどのお念仏であるときいたことがある。これをきいてからの私は少々得たりかしこしという心持がある。お念仏はかすかに併し底力強いものにひびく親様のまことの通いであるという感じである。

或る信仰の強い老婦人から私は或る時さんさんに信仰上の打ちのめしに逢ったことがある。私の家庭生活がなっていないというのである。全く恐縮した。併し負け惜しみの強い私はその御婦人を聴聞育ちのように思った。私は親様育ちだ、あんな聴聞育ちとはちがうと考えて見る。併しこうなつて来ると親様育ちという感じが私の傲慢性をあらわしているのではないかと思う。こんな私に信仰も何もあるものかと自分に対して言わねばならぬ。本当の親様育ちならばそんな負け惜しみを考えない筈である。

親様育ちは親子一如(いちによ)である。親様の懐(ふところ)にいだかれて見れば、人が何と言つても、それほど痛痒を感じないものである。不信心な奴だ、仏の慈悲を説きながら慈悲もなんにも無い奴だと罵られても、その通りだと受け容(い)れられる筈である。私にそれほどの心境が開けているか、これは問題である。私には八十を超えたという此の齡(よわい)になつてもまだ人々に対して頭のさがらぬ傲慢な心が止まない。親様育ちと言いながら傲慢である。且つ又私は甘えっ子である。それ故になお傲慢であるかも知れない。本当の親様育ちの心境に入ること、それは今からの私が身の上で解くべき問題である。

死と対決出来るか

柳 瀬 留 治

かつて朝日新聞のPR版を見るともなしに見ていたところ、井上靖氏の父のことと一文に遭つた。

氏の父上が八十一歳で亡くなり四年になる由、その文中こんなことが書いてあった。

父の死に依つて、私は二つのことを教わつた。一つは父は私と死の間に一枚の屏風として立っていたということである。父の生きていた時は私は父でさえまだ生きていたのだからといった気持ちで、私は自分の死というようなことを考えたことはなかった。併し父に死なれて見ると、死と自分との間がふいに風通しがよくなり、すっかり見晴しがきいてくる。次は自分だという気持ちで、遙か前方に死の海面の一部が望まれて来る。これは父に死なれて初めて知つたことである。父の死によつても一つある。それは父が亡くなると同時に、父は私の心にはいり込んで生き出したということである。父に死なれてから私は自分の心にいる父を感じ始めたのである。

それを読んで私も少なからず同感を覚えた。私の父が死んで五十年になるが、父の死に対しての屏風といった感もあるが、それよりも敬慕している先生や親友などの死により故人を身近に感じるや切である。呼べば応えて貰える程に近く感じられて、とても親しく心温まる感が深い。

井上氏の云われる私の心にはいり来たつたと同じような心持である。井上氏のそうした心持は宗教的ムードの醸(か)もし)来たつたものだろうと思われるが、私のは特にそうしたもの、その人の存命中よりも更にぐんと距離が近くなつて、訪ねることも、手紙を出すことも要せず、思う即座に逢われ、言わずして伝わり、うなづき合つて語れる。それは主に信仰上の師友のようである。

その後私の亡き親友の妻君が死んだ。それは胃の癰腫が崩れて数回にわたる吐血をし、死に瀕しながら、どうあつても生きるのだといったとのことである。誰しも死をさきものとし、生きている現実を肯定し、あだかもそれが、

どこまでも続け得るものの如く思う。それが宗教上に立派に安心決定していても、我々の生細胞が生に執着しそうさせるものようである。結核で死亡した人の肺を解剖しての話であるが、本人がすでに死んでいるのに、その白血球が盛んに菌と戦っていたとのこと。生細胞の如何に執拗なものであるかを思わせられることである。

歎異鈔の九章に、唯円房の不審に對し、親鸞聖人の仰せの一節に「いささか所勞のこともあれば、死なんざるやらんと、心細く覚ゆることも、煩惱の所為なり。久遠劫より流転せる苦惱の旧里はすてがたく、いまだ生まれざる安養の浄土はこひしからず候こと、よくよく煩惱の興盛に候にこそ……」と云わせてある。煩惱といわれるのは、生への執着や欲念などのことである。

無宗教の人で、死後は無に帰するのだと思っている人でも、生に執しない人はあるまい。生細胞からして死ぬまいとしていることからしてそうである。

彼の大戦時のこと、予科練の若者達、それに士官候補生達の死に切迫し、死の決心が出来ず悩んでいる話を聞いたこともある。当時、国のため天皇のためという美名をもって煽り、血を沸かせ、酔わせて決心に向かわせていたようである。敵中へ突貫する時など酒をうんと飲ませて知性も感情も麻痺させて敵陣に跳り込ませたという話もある。

地」といった句、「老疾貧いよいよ濃し、静かなる終末をねごうや切なり」、また「老貧疾の晩年をして残光あらしめよ」など記している。更に「絞首台上数分の人生なり、人生として処すべきなり」とも記しているが、終りには「畢竟するところ汚穢の裸に没して、虚と無とを味到して昂々として別界に生死せん」と記して終っている。死に對して虚無を深く感じたようである。禅の空といった思想的なものでなく、現実の切々とそれを感じたものと読みとられる。そして彼の死の心情にふれた私は、死を見詰めて、その空、この無常さを信仰をもって対決しようという念が急に強くなって来た。

そしてこの信仰をもって死の覚悟が出来るか、禅の上で「死を諦める」即ち死を明らかにし、平気ならしめるというように見られるが、本当かどうか。生に對する我執や執念などにかかり合っているには涯しがないと諦めて、蹴飛ばして問題にしないのが禅の断であるのか、どうであろうと日夜考えた。

翌正月、T先生へ年始に訪ねた。先生は梵語の原典で法華經を研究し、又発掘されたアソカ王のイデクトなどや、又結経から釈迦の根本義を解して、法華の真意を悟った方である。私のたずねたのは、彼の名僧が山門に縛り上げられて火に焼かれる刹那の遺偈に「心頭滅却すれば火もまた

それについて、敗戦の時に、その責を負うて切腹された二人の大将の切腹の現状を、或る将校から聞いたことがある。その日飲んで酔いに酔うて、用意を命じられた。いよいよ腕に切腹されるのだと噂していると、案の定、切腹された。縁側に白絹を敷き、その上でされたが、凄じい血で後仕末が大変だったとのことである。酔わないで正気であっては出来難いらしい。

心中や、飛び込み自殺は、トッサの感情からやるので、何かロマン的な夢や感傷からであったり、又やぶれかぶれであったりする。だが、死損じた人は再び企てようとしないらしい。但し精神的欠陥のある人は別である。

私にSという親友があり、私と同年で、徹底した同信の者で、如何なる悪も光に遭って始めて世に生き得ると信じて精薄者の事業に一生を投じて終った。それが死の五六年前に卒中にかかって手足が不自由となったが、出来る限りのことを働き、跛をひいて散歩もした。最後に倒れる寸前まで感慨を手帳に記していた。

彼の死ぬ一ヶ月前あたりからの日記を見ると、信仰をもって死と対決しようとしたらしい。とても読み辛い字で、凡そ禅の半偈のような、又俳句に似た隻句で「救いは八方空の清貧に」とか「払掃俗物外心」とか「下々の落ち心

涼し」といったこと、それは本当に心頭を滅却するとそうなるでしょうかと尋ねた。「それは本物でないよ」と云われた。幾分、野狐的なものが言わせたのであろうか、朝比奈宗源師にお聞きしたいと思っている。

仙涯和尚であったか、その臨終に弟子達が遺偈を乞うたら「死にともない」といわれた。弟子達は「それでは誠に外聞も悪い、もっとよいお言葉を」といったら「ほんとにほんとに」と仰言ったという。私もそうである。

今私は、この体、この命の無常なことを知ってはいる。だが永久に存在する如く思いたくは仕様がなない。又己れ自体が底から自我意識の功利以外はなく、これは解脱によって滅ぶべき代物たることも判っているが、この己れと思っているものが滅んで無になると思えず、この己が愛しく可愛くて常住でありたいと念ずる。

元来、私の相対的な頭では、無か有かの二つしか思えぬ。有でも無でもない中道の境地など考えようがない。

そうした悟った世界から我々を見たら、凡夫の迷妄であり憐れに見られよう。

併し、我々には、有と無との相対概念しか持ち合せていないので、どれだけ押し詰めても、それ以上の世界を思惟することが出来ないのであるまいか。それだと判ったら、

下手な考え休むに似たりで、それは概念の遊戯に終って、それ以上に進めないことが必定である。

教学史上、数多の学僧達が「〇〇に非ず、又非ざるに非ず」とラッキョウの皮をむき、むきては捨てて、真が得られず来たことである。輪廻といい、生死流転とはその涯しない繰返しなのであるまいか。

私はしばしば歌よみの集りで私に近い年齢の人々と会う多くは自身の健康法を語り、成るべく体も心も若く明るく生きようとしている様子で、死と対決どころでなく、そんなことに触れまい、考えまいとしているらしい。

誠に無常や死とかけ合うのが迷いである。涯しないことだとお手あげした私には、成程、世の閑功な人達はそうだろうと思つた。

だが、わが空穂翁は、それと大違いである。係り合つて涯しのつかぬもの、それはそれとし、無常な人間の全体を掴んで立つていられる。これは禅の生を明らめ死を明らめると等しく、生死解脱の悟りの境にあるのだと思う。対決などしようと思はず、相手にしない、超然とした態度、それが禅の境地だと思ふ。

相手にせぬということは悟りなのである。涯しのつかぬ

でなく、首を垂れ、感謝し詫びながら行ふ安心生活である

それを先程「そした己だとし、相手にせぬのが悟りだ」と申したのである。片付けて判つた風をしている意でもなく、勿論知性で底の見透しのついた意でもない。悟りというのは理の上、知の上で判つたでない。それだと空手形で絵にかいた餅で、情の空腹が満たされない。わが物になつて手放しに満足は出来ない。「手の付けようのない己の全体、それをこちらに任せよ」との仰せに打任せ、己に見切りの付いた、それを悟りと申すので、こちらの自我我欲の小知が破船し、この大船に乗れといわれて乗り移つたことである。歎異鈔の言葉の「弥陀の知恵をたまりて日頃のころにては往生かなうべからずと、もとのころをひきかえて本願をたのむ」ので、おのれの小知の物尺を捨てて向う様の不思議の力にまかせ申すのである。

近角常観先生はつねづね「弥陀の智慧をたまわりて」の文や、また「無碍の仏智」とか「仏智不思議」、また「智慧の念仏」の御文を引かれ、それから「本願円頓一乗は逆悪撰すと信知して」の信知を強調された。「おのれの小見の駄目なことを悟るのだ」と仰言つた。世に見るごとく、念仏は感傷的に喜ぶのみでない、信知するのだ。

それでこそ、体、命に執着して死にたくないという情執

ものと知つたら、相手にしてねちねち取っ組んでいるのは迷いであり、愚である。

私共のもつ知性も感情も、生活欲求を遂げようがためのもの、自我の欲求を遂げるために発達したものである。その点、自我意識を持たぬ一般生物よりも厄介な生き物である。生物なら生の本能だけであるのに、人間は自我を意識し、それで苦しむ。

自我といい、そのもつ知性、情意に悩む、それを覚者の仏陀が見られると、煩惱の一語に尽きるであろう。この頃の個性の伸長というが、仏教には個性の語をかつて見ない。個性は煩惱の種々相であろう。

近代生活には意欲が必要だといわれ、欲求充足の念の涯しないため、涯しなく文化を生むのだとされる。人生とは煩惱を営む世界である。だが、初め現実そのままを肯定してのものは生物的な生活である。それが悪くも善くもそれより他に生きようがなくやるのだといわば、否定の上の肯定で生きるのである。

肯定とは何か、生物本能的、自我的な肯定ではない。そした自我意欲、そした生活を免れ得ない凡夫たるを憐んで捨てないぞとの本願のよび声に、動物と選ぶなき己れに垂れ給う慈悲に満ち足りて、首を垂れ、安んじて与えられた生活をする、という肯定である。よいと安心してする肯定

をもつたまま、じたばた藻掻くまま、大船に引き取られる。念仏は、大船に乗つたか、また乗らぬか、の二つに決する。半ば乗っているというのではない。信か、疑かのいずれかの一である。

私はそれに乗つた一人である。だがしばしばぐじぐじ小知に悩む。だが大船は撰取して捨てず、で下してくれぬ、それでこそ救われ、不退転なのである。信がゆらいでも乗ってしまった後は後の祭りである。でないと迷妄はてしのない我々が救われっこはないのである。

我々自我の知性をどうしほつても、相対的に、善と悪、有と無、利と害、そした考えの外へは一步もふみ出せない。そしたものを超越した無碍の一道なんて到底判るはずがない。

それなのに、自分の信仰をもって死と対決しようとし、死に対する厭な気持を処理出来る気がして、碧巖録（へきがんろく）や、無門関（むもんかん）も読んだのである。

私も矢張り一個の哺乳動物でしかない。世に信仰をもって死と対決された方もあり、癌の宣告をうけて、いよいよ念仏一つを喜んで自若として息を引き取られた方の話を聞いたが、私は情執が深く、いわば分裂性患者の傾向がありいつまでもぐしゃぐしゃして、自ら「断」が出来ない。こちらが断が出来ぬのを、向うが見抜いて断じられ、はじめで助かったのである。

「人生随想」の後篇より。

現代社会における仏教の在り方

松 本 解 雄

今日、仏教といえ、われわれは仏教の宗派と結びつけて考える。しかし今日宗派の中に眞の仏教が生きているだろうか。学問的には、それぞれの宗派においてそれぞれの教義が厳然として存在している。ところが、宗派としての活動面をみると、儀礼的方面のみが表面に出ており、人間の生き方に対し、本質的に内面からのほたらきは、ほとんどそのかけをひそめていりさまである。したがって現代の若人たちが、仏教と言えば、直ちに「死」につながる儀礼としてしか受け取っていないのは、大いに理由のあるところである。しかし本来の仏教は、われわれの人生に対し、正しく強く生きるバックボーンを与えるものでなければならぬ。

さて、仏教について、特にその現代社会における在り方を論ずる場合、各宗各別に論じなければならぬけれども、紙数の制限もあり、能力の限界もあるので、私は自分の信仰の立場から、以上の問題を、真宗に限って論じてみよう

と思う。もともと真宗は、所謂宗派とはその本質的概念は違ふようであるが、いましばらくその点は伏せておき、一般概念に従って述べることにする。真宗は形式的には現代日本における大宗派であり、そして教義的にも、最もわかり易く、実践的にも一応大衆化されているが、従来あまりにも未来往生という点に重きをおかれ、現実面はとかく軽視されてきたきらいがあった。この点はしかし、宗派を離れて開祖たる親鸞の思想信仰にじかに触れようとする場合必ずしも問題とはならないようである。若い学生諸君と宗教問題を話し合う時にそのことが思われる。そこで私は、本質的には優れたものを持ちながら、何故に現代宗教としてのはたらきを十分に發揮し得ないのであるか、換言すれば、宗教としての活動が十分に果たされないか、と言う点について考察してみたいと思う。

真宗は、その教義から言えば「在家止住の男女」を対象としていりるから前述のように教義は簡単であり、実践的にして、各本山、末寺において報恩講が営まれ、そこでは必ず「如來大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし、師主知識の恩徳も骨をくだきても謝すべし」と、その結願にあたって唱和される。また念仏も信後にあつては、専ら報謝の念仏として説かれている。しかしして真宗教団が親鸞以来、よく庶民の宗教として津々浦々にまで普及し隆盛に赴いたのは、主としてこの決定心のうえにたった無私の報恩感謝行によつたのである。

さて、現在の教団にあつては、いかほどの報謝行が実践されているであろうか。形式だけはいかにも立派になされても、魂の抜けた形骸にすぎないのではないか。「身を粉にしても報ずべし」とは決して単なる形容の言葉ではなく「地獄一定」の私が、不思議にも「光明の広海」に出して頂いた心からなる讃歌であり、実践でもある。

しかししてかかる徹底した報恩行は「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば遂ぐるなりと信じ」「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とよき人の仰せを被りて信ずる」ところの「決定心」の下にのみ自然にじみ出るものである。故にかかる報恩行のみられないことはその基底をなすところの決定心、即ち信の欠如である。蓮如が「一宗の繁昌と申すは人の多く集り威の大なる事にてはなく候、一人なりとも人の信を取るが一宗の繁昌に候」

もきわめて易いのであるが、従来信心の在り方について一つの大きな盲点をはらんでいたように思う。この盲点を打開克服しなければ、開祖親鸞の「信心」と同一味なることができず、従つて開祖に対する尊敬と渴仰の念を抱きながら、宗教としての中心を離れて、徒らにその周辺を空転しその生命を失うことは理の当然と思われる。この盲点を克服することによって、始めて本来の軌道に乗り、七百年前に、当時の悩み苦しめる民衆に与えたような、暗夜の灯を仰ぐことができるのである。以下その盲点の打開について述べることによつて私の結論は明らかとなるであろう。

真宗の信仰は端的に言つて「一念帰命の他力の信心を決定する」ことが必要であり、「罪は十悪五逆、謗法闡提（ほうほうせんたい）のともがらなれども、廻心懺悔して深くかかる浅ましき機を救います弥陀如來の本願なりと信知して、二心なく如來をたのむころの寝ても覚めても憶念の心つねにして忘れざるを本願たのむ決定心をとる信心の行人（ぎょうにん）とはいふなり」とあるように「廻心」による「決定心」を得なければならぬ。

しかるに今日の宗派にあつては、これを単なる知的理解にしているとしか考えられない。何となれば、真宗にあつては「現生十種の益」にあるように「知恩報徳の益」が強調せられ、現代の宗派においても、最も重要な宗教行事と

と言われたが、現在の教団では、その信を取るということについて極めて安易に考えているようである。一寺の住職となり、布教師となるには、一定の学歴を有し、形式的な得度（とくど）を受け、ある程度の弁才を持つことが条件であって、最も重要な「信」の有無はほとんど不問に付せられている状態である。否、信については教義上の知的理解と混同して、知即信と考えているようである。

こうした事情になったのは、真宗寺院では本来いずれも世襲制度をとっているためと考えられる。本来の宗教の世界は、人間的自覚のうえに立って、生命自らの根元的要求に基づいて開かれたものである。しかるに世襲制度の下にあっては、かかる人間的要求の有無いかんは問うことなくただ寺院の子弟として生を享けたという事実によって、自己の生涯が決定づけられてしまう。中には世襲制度の下でそれなりに人生苦を味わい、真剣な求道をして信の確立した人や、それを求めている人もあろうがきわめて希である。多くは知解を信の代用として間に合せの偽装で糊塗しているにすぎない。その点在俗の信者で出家した場合信のうえに立つ人もあるが、それも前述のような教団の雰囲気の下では本来の姿を現わすことが困難になり勝である。

宗教自体から云えば、信が根本で、そのうえから「自信 教人信」の道も自らひらけるが、現在の教団では、最も肝

聖人は今一人の私

花田正夫

「今一人の私」という一句を私は始めて聞いたのは、もう三十余年前のことである。昨年亡くなったヘレンケラ

1 女史からであった。女史は幼い時大病を患い、視力も聴力も失って、自然に啞者となったが、幸に家庭教師のサリバン女史の献身的努力によって、すぐれた天分が開発出来、大学を終えてからは、世界の身体障害者のために八十年の生涯を捧げつくした人である。その女史がいつも、

「盲で聾で啞の私には、外からの教師は不用である。三重苦の私になくってはならぬのは、今一人の私である」と、サリバン女史を讃え、万腔の感謝をもって語っていた。外からの教師とは、よいと思うことを種々と教えてはくれるが、それが出来ない、私の手に負えぬと見捨てる人である。今一人の私、とは「ヘレンさん盲なのか、じゃあ私が貴女の目になりましょう、聾で啞なのか、じゃあ私が貴女の耳になり口になりましょう」と女史になりきってくれる人である。このような人があってはじめて、永遠に

心な「信」についてはあまりやかましく言われぬ。しかも肉食妻帯を宗風とする真宗にあっては、当然家族生活をするから、経済的負担も相当なもので、どうしても葬式・法要で布施を受け、檀家の少ない寺では、教員とか、吏員となつて収入の道を講じなければ生計が立たない。一方、檀家の多い寺院では蓄音機的な読経によって多く収入を得貴族の生活をしている。

しかもこの在り方を自他共に大した批判・反省もなく長い惰眠を続けているのが現状である。一部良心のある、とくに青年僧の間には深刻な悩みをいだき、現状の打開に心勞して苦慮している人達も数少なくないようである。ただこの人達も、教義上の盲点を自覚し、自己の信確立の方向に進まなければ、切角の苦悶はそれだけにとどまり、目的の達成は出来なくなる。かくては大伽藍を抱えながら、本来の使命を果たすことができず、僅かに観光的対象、また儀礼の場として細々と命脈を保つにすぎないであらう。

しかるに人類の文化、思想、人間の生き方などを思うとき、今こそ正しい庶民的宗教を必要としている。それには禅、法華などもあるであらうが、私は自分の過去をふり返り、親鸞の教えこそが、その正しい意味において全人類のうえに門戸が開かれなければならないと信じる。云々。

『仏灯をかかげる』より抄出。

光の射さない、そして何処からも音の聞えない暗黒、無声の世界から浮かびあがるのが出来たのである。

私はこの一句を聞いて心に深く刻まれたのであるが、そのまんま、長い歳月が流れ去った或日のことである。仏法に遭うよろこびを、大海で盲の亀が浮木にありよろこびにたとえられるが、私自身を省みると、盲であるばかりでない、泳ぐ足もない身である、犬も歩けば棒にあたりと世間によくいうように、盲の亀でも泳ぎ廻っていると浮木にありこともありうるけれど、目なし、足なしの身にはその道は全く閉ざされている。これは譬喩を単に言葉の上でもてあそんだのではない、その通りの私である。

四門を出遊された仏陀は、若くて丈夫な御身でありながら、死と病と老を我身のうえに諦観されているが、愚鈍な私は馬齢すでに六十七を迎え、近親、知友の無常にありことは、晩秋の落葉のようであるのに、その上自身に二つも

痼疾を持ちながら、なお死を遠くに眺めている。

また人權の尊重すべきことは耳に聒（たこ）ができる程聞かされ、自分もその通りだと百も承知しながら、いざ實際問題となると身勝手な心に支配されて、人を冬は調法がり夏は厄介視する火鉢同様のあつかいしか出来ない、人を物としか見ることの出来ぬ盲人である。

また、西哲は愛は惜しみなく与えると教えるが、私共の愛は相手に何等かの報酬を求める範圍からはすこしも出られないで思うようにむくいられないと愛が憎みと変る。まして末通るまことなどは心も言葉もおよびもつかず、一分一厘も近づけない、全くの足無しの身を自照させられる。

この目無し、足無しの身にはもう「外からの教師は不用である」、なくてはならぬのは、私の目となり、足となつて下さる「今一人の私」である。

それなのに「仏かねてしろしめして」この智目、行足の無い身を「ことにあわれみたまう」弥陀仏の大智と大悲のまことを「親鸞一人がためなりけり」と聖人は信誓（しんしょう）され、そのおよろこびの上から、私共に同座して下さつて愚禿と名告られながら、仏の御眞実心を伝えて下さるのである。

その聖人は「みのりをよろこぶ心のおろそかな、また浄

れを涙山したが、死を前にした患者を医師として外からまもることは出来ても、それ以上はどうにもならない。そうした病人はまた、心の底で死をおそれ、何時も問題にしながら語ろうとしない。また外からのどんな言葉もその人には空しいものとなる、……結局この問題は病人自身が考え、自分でこたえを見出す外はない。死をみつめて自分の今までの生活の空しさを知り、はじめて生きる、眞の意味を見出さねばならぬ云々」というようなことを人生読本で話された。全くその通りで、誰からも答えて貰えず、是が非でも自分で見出さねばならぬが、その出来る人は稀である。死をみつめ、直面し、しかもあらゆる地上の言葉が空しくなり、自分の今までの生のうづろさを知る時、そうした私の心の底の底まで知り尽くされて、「お前もそうなのか親鸞（わたし）もそうなのだ。このそらごとたわごとまことあることなき身を何処々々までも呆れたまわず、見捨て給わぬお方は弥陀一仏、念仏のまことばかりぞ」と、私の中に入り、私の身となり、いのちとなって、ひかりを掲げて下さる聖人ましまして、はじめて三途（さんず）の黒闇がひらけるのである。本当に二度とない人生、眞剣勝負の生活において、このよき人にあえたことは何というたのもしさであろうか。

土にいそぎまいりたい心の無い」私に「親鸞もこの不審ありつるに、汝もおなじころにであるよ」と同座して下さつて、この「よろこぶころもなく、急ぎまいりたき心の無い者をことにあわれみたまう」と知らせて下さる。

また、人口に膾炙（かいしや）されて臨末の御書に「一人居てよろこばば二人とおもうべし、二人居てよろこばば三人と思ふべし、その一人は親鸞なり」とある。もとよりこの御書は聖人の滅後に、聖人を渴仰してやまぬお方の書であろうが、聖人のみこころを我身にうけられた人の手によると信じられる。

このように、喜べぬにつけ、喜ばれるにつけ、さらに善きにつけ悪しきにつけて、何時でも何処でも、同座同心、同悲同喜して下さる聖人は「今一人の私」になりきつて下さるのである。

「独生、独死、独去、独来」のはてしない生死の大海にあって、一つ身になって下さるお方にありことは何と云う力強くありがたいことであろうか。私のいのちがそこに導かれ、支えられている、否、そのお方が私のいのちそのものになって下さるのである。

永い間アフリカに渡り、シユワイツァー博士と医療に尽くされた野村博士が、「四十余年の診療生活で、当時不治の癩患者や、難治の結核患者を受持つて、いたましいお別

さて、私はあまりにも容易に聖人が今一人の私になって下さる事実を述べたが、そうなつて下さることは、不思議な当然である。不思議とは、私共の五分五分根性を出られない身には、あり得ないことであるが、当然とは仏力の不思議な加威力（かびりき）によって不可能が可能化されるからである。この消息をひそかにうかがつて見よう。

菩薩は同事（どうじ）の行を究うされる。同事とは、病人を看護するには病人になりきり、師は弟子と同座することであるが、私共凡夫の境界では、そうありたい、そうせねばならぬ、それこそ本当だと百も千も承知しながら、大空を憧れながら翼のない鳥が地上をのたうち廻るように、飽くない利己の一念に障えられて、どうしてみようのない人間の持つ力の限界に直面する。聖人もまた、「今生いかにいとおしむびんとおもうとも存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし」とも、また「小慈小悲もなき身にて有情（うじょう）利益はおもうまじ、如来の願船いままさずば苦海をいかでかわたるべき」と悲歎されながら、如来廻向の本願の船、お念仏のなかに「末通りたる大慈悲心」を渴仰されている。

そこに「今一人の私」になつて下さる聖人は、聖人であつて聖人でない聖人「虚仮不実のこの身」、「無慚無愧のこの身」、「さればそくばくの業をもちける身」に蒙られ

る「弥陀廻向の御名」のおのずから照り返しとして「功德は十方にみちたもう」大心海化現の聖人である。併し月に向ってその光を讃えるとき、お月様が自らを知る方であれば「いいえ、この光は私ではありませんよ。太陽の光を反射してるだけです」とこたえるであろうが、聖人もまた、そこに御自身は無能無力であって、弥陀仏のひとり働きですよと、仰言るのである。

終りに、「聖人は今一人の私」という、横着で不遜の題を掲げたが、このことは、私の智慧才覚で気付いたのでなくて、聖人がすでにすでに私になりきって下さった真実の催しによったのである。

仏教の説話に、閻浮壇金（えんぶだんごん）という不思議な球がある、それをひとたび地上におろすと、時と共にだんだんに沈下して行って、泥地を貫き、砂礫層をすぎてやがて地盤全体が一枚の岩になっていて岩盤、地殻に必ず到達する、とある。聖人のおしえ、聖人の真実のいのちが、知らず識らずに私の身心にしみとおって行って、聖人がそのまま、今一人の私であったと気付かして下さるのである。聖人が「真実」の実に左仮名をつけられて「実」というはかならずもののみとなるをいう」と訓（よ）まれていくことも思い併せる、全く願力自然の催しによると感佩

の中に如来ましませば生死なし」とある法味もそこに感佩させて頂けるのである。

御伝抄に、

「仏法むかし西天よりおこって経論い東土に伝わる。これひとえに上宮（聖徳）太子の広徳、山よりも高く海よりも深し。わが朝、欽明天皇の御宇にこれを渡されしによつてすなわち浄土の正依経論等この時に来至す。儲君（ちよくん）もし厚恩をほどこしたまわずば、凡愚いかでか弘誓にあうことを得ん。救世（くせ）菩薩はすなわち儲君の本地なれば、垂迹（すいじゃく）興法の願をあらわさんがために、本地の尊容を示すところなり。そもそもまた大師聖人（源空）もし流刑に処せられたまわずば、われまた配所におもむかかんや、もしわれ配所におもむかずんば何によつてか辺鄙（へんび）の群類を化せん。これなお師教の恩致なり。大師聖人すなわち勢至の化身、太子また観音の垂迹なり。このゆえにわれ二菩薩の引導に順じて如来の本願をひろむるにあり……」

と聖人が後のとき語られているのは、聖人が御自ら私共の先達となつて、水火の中を歩まれつつ、おのずから衆禍の波の転じられる妙趣を知らせて下さるのである。

阿闍世王は、五逆の罪の重さに、地獄の華報をうけ、必墮無間の苦に悩みおそれたが、ひとたび釈尊に導かれて信

している。またそれに気付いて見れば、今はじめてそうなつて下さったのでなくて、遠い前からそうなつて下さった洪恩に驚き、身の愚鈍をはじるばかりである。妙好人の浅原才市翁が

あなたのところが わたしのところ

わたしのところが あなたのところ

わたしがあなたになるのじゃないが

あなたがわたしになるところ！

と讃えているが、この消息をこころにくだいまで言いあててくれている。

「さるべき業縁のもよおせば、いかなる振舞もすべし」と仰言る聖人は、煩惱具足、煩惱熾盛の身として、業縁次第で、どんな業さらしをするかもはかられぬ私、そうなれば世間のあらゆる人々から呆れられ捨て去られる私に、飽くまでも同座して涙をもつて接して下さる方である。この聖人をおして「一切衆生おのおの異なる苦を受くるもみなこれ如来一人の苦なり」とか「慈悲随逐（すいちく）して犢子（とくし）のごとし」とか「慈眼もて衆生をみそなわし、平等にして一子のごとし」等々の涅槃経の聖意もうかがうことが出来るのである。

また、こうしたお方一人ましませば、火の中、水の中を越えさせていただけるといふものである。法華経の「生死眼がひらけると、一人でもこのよろこびを伝えることが出来れば、自分は無量劫に地獄の苦を受けても悔いるところはない」と仏前に言上している。

また法然聖人が御流適（ごるちゃく）を前に、御老齢で再会を期し難いと感じられて、念仏の一つを有縁の者に渡したいとの思召しから法話を続けられた時、御弟子の一人が聖人の御身を案じ、御中止をとお願ひした時「たとい所刑されようと念仏の一義とどむべからず云々」と仰言つたことは有名である。

これひとえに、弥陀の本願のたのめさを仰いで、善悪の業報に随順されての無碍の白道を歩まれた方々の尊容である。

昭和四十五年十一月二十日稿了。

徒然草抄

まことに愛着の道、その根ふかく、源とおし。六塵（色声香味触法）の染欲おおしといえども、皆厭離すべし。その中に、ただかのみどいひとつやめがたきのみぞ。老いたるも若きも、智あるも愚なるも、かわるところなしとみゆる。

あとがき

年の瀬がまいりました。師友をはじめ読者の皆様にあらためて御礼申し上げます。痼疾、愚鈍の身で、月々をいのちの単位として、トボトボと発行させて頂き得ますのも、裏に表に、右に左によりそうて御励まし下さる御蔭とよろこんでおります。

さて、毎年のことではありますが、年の暮には蓮如上人の「歳末の礼には信心をとって礼とせよ」との仰せが心を去来し、念仏の催促を蒙っております。親鸞聖人も「ただ信心を要とすとしるべし」とお勧め下さいます。智目行足を共に欠く凡愚の身には人格の無上完成、成仏への道は、本願を信じ念仏申す以外には絶無であり、人格の無上完成がなければ、人としての真の幸福もあり得ないのであります。私共は、徒らに眼を外に向けて、衣食住の満足を求めさらに流行を追いレジャーの楽しみを追うて幸せを見出そうとしていますが、それは底のない槽に水を満たそうとするおろかさにと

ります。

源信僧都が「それ人間に生まれたること大きなよろこびなり、……本願にあうことをよるこぶべし」と、手にも持たれずして人間の生き甲斐を見出していられることは、寒風きびしい歳末に大きな灯火を私共に掲げて下さって、ここに道あり、と教えられるのであります。

このように古き人々があらゆる苦難の末にのこして下さった言葉を、体験のうえからわたくしの言葉とさせて頂くことは容易のことではありませんが、そこに古今に通じる大道がひらけ、十方を照らし、未来際を貫ぬかれるのであります。

「衣裏宝珠」の喩が法華経にあります。古人が見出した宝を私共の身近にのこして下さっていても、その宝に気づかず、空しくさすらうことを警告されたものであります。私自身、聖人の言葉を沢山読み、且つお聞きしながら、よそごとにと終っていることの多いのを知られ「真理の大海の前に、なぎさにあつて貝殻の二つ三つを拾ったに等しい、末だ知られざる真理は大海の如し」と云ったニュートンの言葉をしみじみと知らされる歳末であり、これからだなあ」と励まされています。

御案内

△ 毎月第一、二、三日曜 午後一時半

一道会例会

市電 新郊通り一丁目下車

東へ三筋目左入る

△ 毎月二十四日 午前、午后

教西寺法話会

市バス 北山通り下車

市電 御器所通り下車

定価 半年 二百五十円(送共)
一年 五百円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

電話八二一七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷 人 吉野 穂志郎

名古屋市南区駄上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番

郵便番号 四五七